

2023 Newsletter Japanisch

Clip-Quelle: [ブログ（日本語） - SY MAYONA II](#)



ニュースレター56、11月18日

10月10日、スイスに戻った。

10月6日に船を陸に揚げた。マデイラ島出身のプロサッカー選手に因んで クリスティアーノ・ロナウド・マデイラ国際空港と呼ばれる空港の滑走路の下が 船置場となっている。雨を凌ぎ、ちょうど良く日陰となっている恰好の場所だ。

いくつかの修理すべきことの注文、契約に時間がかかる。

ホテルに部屋をとり、レンタカーで通って片付け、掃除をこなす。ハシゴを掛けた船の上がり降りは恐怖だ。高所恐怖症の気がある私は 下に水がないのはどうも落ち着かない。残りの日程の1日は観光に当てた。

「大西洋の真珠」と呼ばれるこの島は 温暖で緑に溢れ、道路脇にも花々が咲き乱れている。ハイキングに適した場所もたくさんあるようだが 残念ながら時間がない。ホテル近くの村 サンタクルーズで何度か食事を取った。屋外でのんびり魚介類を楽しみ ワインを飲み、旅の余韻に浸る。

この港にいる間(一週間ほど) 一つしかないレストランで 毎日 食べたラパス貝が一番 美味しかったなあ。ビールとラパス、良き組み合わせだ。

10日、早朝 朝焼けの中、マデイラを発った。昼過ぎにはチューリッヒに到着、船では本当に遠いと感じたマデイラ島も 飛行機では簡単に行き来できるのだ。

来年1月、マデイラ島からのセーリングは どんな旅に??



ニュースレター55、10月1日

6月25日、ポルトガル本土を離れ6日目、夕方 マデイラ諸島のPorto Santoに到着した。港は満杯で場所がなく、沿岸にアンカーを下ろす。海に入り 1週間ぶりに垢を落とす。海水温度26°C、気持ち良い。

翌日、モーターボートで陸に上がり、レンタカーで島を一周する。

面積 42.17平方キロメートル、2つのゴルフ場があり、ここだけ 明るい緑の芝生が見られるが、全体は 火山岩で覆われている。島の南側の海岸は 9Kmに渡って途切れることなく砂浜が続いている。

高台から見る海は 琉璃紺、青藍色、紺青色と 微妙な青のバリエーションで波を寄せてくる。溶岩の岩場が 切り立った厳しい姿で波を打ち返している。

ゴルフ場のレストランで昼食をとる。ハイシーズンでないの で ほとんど人はいない。給仕のひとはイタリア人でトリノ出身とのこと、コックはアルゼンチンからだそうで 結構人種は、坩堝のようなのだ。

夕方 海岸沿いのバーで 過ごす。 椰子の木々の間で 満月に近い月が美しい。隣のテーブルのポルトガル人達が ラパス貝のオリーブ油煮がお勧めと 食べてごらんと差し出される。コリコリとして 美味しい。友達のスイス人夫婦には不評、味覚の違いは悲しいことだ。美味しいものは 分け合って楽しみたい。

翌日は のんびり過ごす。27日、マデイラ本島に向け出発。

昼ごはんの用意をしようかと思っていた時に、「魚だ！」と叫び声が。スペインでボニトを釣ってから 全く収穫なかったが、とうとう 掛かったようだ。ルカスとマーコスが釣り糸を引き上げ 格闘している。かなり大きい。

マグロだ。イエローフィンだ。体長76cm、重さは 恐らく6kgぐらいか、ルカスは 8kgと豪語している。皮が厚いし、下ろすのは結構大変だった。

早速 マリネして食する。おいしい。お米を研ぎ、寿司の用意だ。遅めの 握り寿司昼食、これは幸せなことだった。

夕方6時過ぎ マデイラ本島、Quinta do Lordeの港に到着した。

夕飯は 当然ながら マグロ、照り焼きにして食した。

マーコスとスーザンは 明日から ホテルに移り船上生活は最後の夜だった。

刺激的な最終日、終わりよければすべて良し。



遠方にマデイラ島

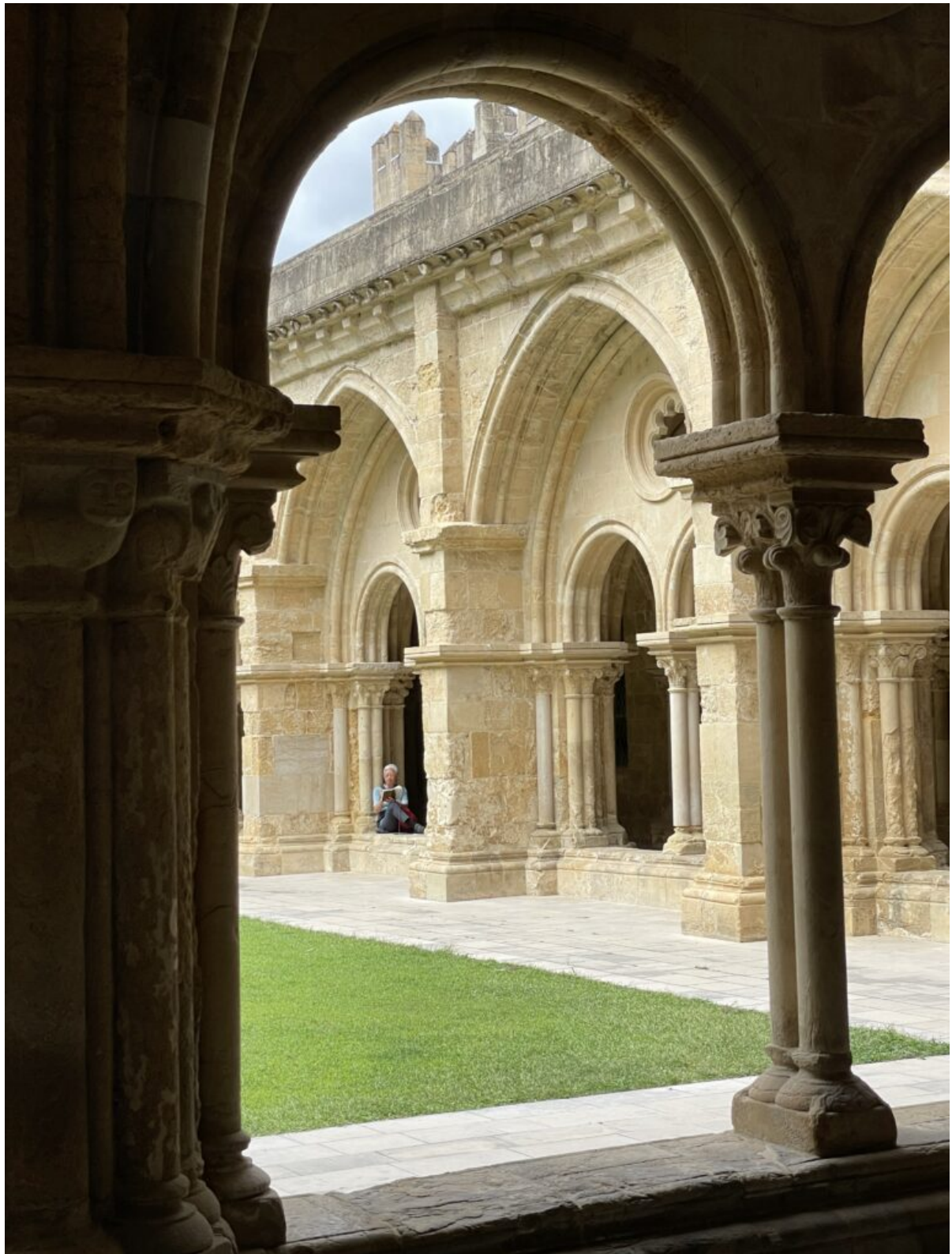
ニュースレター54、9月24日9月20日、10時過ぎ シーネスSinesでアンカーを上げ、マデイラへ向かう。到着予定は25日、5泊6日の海上生活の始まりだ。17日に、およそ2週間分の食料を準備した。おそらく、何があっても飢えることはないだろう。私は食事係で、

あとの3人が、4時間ごとに交代で見張りに立つ。とはいえ、GPSで現在地、他の船の位置を確認するのが主な役割だ。昼食に重きを置き、後は軽食を用意する。初日、張り切って昼食に野菜天ぷらを用意。張り切った割には スイス人には有り難み少なし。まだ、スペイン沿岸が見えている。風は順調だ。ゆりかごの中で睡眠も十分だ。2日目、風が強めで船の傾きが大きい。不意の動きも結構ある。傾いたままで料理するのはほんとに疲れる。他に大した運動もするわけではないので、体力的には大丈夫だ。スイス人好みの生クリームのたっぷり入ったビーフストロガノフを供する。当然ながら好評だ。牛肉は真空パックの長持ちするものだ。陸は見えなくなった。少しだけ 雨が降った。夜7時半ごろ、陽が海に沈む。これは美しい。夜間、風向きが一定でなく帆の揺れが激しく、その音がうるさい。さすがに寝付けない。朝方なんとか 睡眠が取れた。眠れない中 考えるのは翌日の献立だ。パスタが残っているし、多めに買ったジャガイモも使わねば。これはグラタンだな。が、こういう食事は私のストレスがグッと高まる。私のためだけにご飯を炊くことに決め、少し安堵する。3日目の朝、スーザンが低血圧のため頭痛がし、船酔いもあるとのことだ。食事は取れないと、パン、スープ、お茶で。風向きが変わり、船の傾斜が少なくなり、船内の動きも楽になる。ルカスが船後方で バケツに汲んだ海水シャワーを浴びる。海水温は24度まで上がっている。長い綱の先にフェンダー(浮き輪)をつけて流す。誤って海に落ちた場合の救援のためだ。夕日が落ちた後、広い空 一面、雲が薄いピンクに染まり 船を包むように流れている。料理、片付け以外の時間は ほとんど読書で過ごす。インターネットは使用不可のため、本に集中し、ガンガン読める。ダウンロードした本をiPadで、紙の本と並行して 2、3冊 同時に読んでいる。ドイツ語、日本語 両方だ。夜 8時過ぎには横になって 本を読み、また献立を考えながら 眠りに落ちる。明日は 寿司だ。ポケボールだ。4日目、 昼過ぎに マーコスがツォップを焼く。焼きたてのそれで アペリティフだ。皆の満足度高騰する。 私の日々の労働は何なのだと、陰でいじける。しかたない、スイス人なのだ、皆。

5日目、朝、日曜日のツォップで皆、幸せそうだ。「イルカだ。」5日目にして 初めて現れた。これまで 5ヶ月以上セーリング中、すでに何度も見ているので 私はどうでも良い。釣り糸は常に垂らしているが、収穫なし。

牛肉のトマトソース煮とマッシュポテトが昼食だ。隠れて(隠れることはないのだが 何となく)、冷やご飯と塩昆布のお茶漬けに、ビールとパンで漬けた大根と胡瓜の漬物を食べて人心地となる。

明日はマデイラに到着だ！



ニュースレター53、9月6日ポルトガルの大西洋側を南に下っている。ポルトを過ぎ、Figueira Da Fozの港に三泊し、ここから コインブラCoimbraへ遠出した。モンデゴ川沿いにあるこの街は ポルトガル最古、ヨーロッパでも屈指の長い歴史を持つ大学で知られている。1290年に創設されたこの大学は もちろんユネスコ世界遺産に登録されている。電車で到着したコインブラ駅から 小高い丘の上にある大学を目指す。石畳の道、階段、

至る所にある教会、すべてが古い。昼食に入ったレストランの給仕はブラジル人の修士課程の学生だった。ポルトガルとブラジル、言葉が同じなのはラッキーなことだ。言葉と云えば、スペインではほとんどの人がスペイン語しか話せず、コミュニケーションに苦労したが、ポルトガルは英語やフランス語も話す人が多く 旅行客にはありがたい所だ。大学は学部ごとに建物が設置されており、いくつかの博物館が内部にある。自然科学、化学、地質学などなど訪れたが、とにかく古いものの展示だ。やたら古く 壮大な数の実験器具などが、近代的に展示されている。フランシスコ ザビエル所縁の日本の掛け軸もあった。世界一美しい図書館と呼ばれている ジョアン5世図書館 Biblioteca Joaninaの入場券が 売り切れのため買えなかった。たまたま、障害者の車椅子が別の入口から入るところに立ち合い、そこから覗いていると 係員の人が、「入っていいよ。」と言ってくれ、なんと、裏口入館した。ここも古い。6万冊の蔵書、煌びやかな装飾に 圧倒される。虫除けのため、夜間はコウモリが飛び交うようで、テーブルの上はカバーがかかっている。街で 昔ながらの制服 黒いマントに身を包んだ学生も目にした。まだ夏休暇中なので少人数だが。ここは 学生ファド(民族歌謡)も有名だ。残念ながら時間が合わず コンサートは聴かれなかった。昔も今も 学生が集う街は特別な魅力が満ちているように思う。学生の歌うファドに „ Coimbra tem mais encanto na hora da despedida“ の一節がある。
「コインブラは 別れの時こそ、一層 美しい」
若者の出会いと別れ、住人の三分の一が学生の街は いろんな熱気で蒸せているに違いない。



ニュースレター52、8月25日

小さな港町 フィニステレFinistellae 『地の果て』にいる。

フィニステレ岬には 灯台が置かれている。

聖ヤコブの道(サンティアゴ・デ・コンポステーラ)の巡礼者の最終的な目的地なのだ。巡礼者が旅の終わりに、この岬で unnecessary になった巡礼用の服や靴を燃やすことが習慣とな

っていた。が、2010年に環境問題から焼却は禁止された。我々のプランは 夕方 港から45分かけて岬まで歩き、そこにあるホテルで食事をし、有名な夕日を見ることだ。しかしこの日、ドップリと深い霧に包まれている。いつか晴れるだろうと歩いていたが 甘かった。道路脇の木々の下方には海があるはずだが 全く見えない。灯台に到着したが 全貌が見えないほどの霧だ。

岩の上に リボンを掛けられた登山用スティックと一足の靴が置かれている。巡礼を終えた誰かが置いたのだろうが、ゴミでしかないのが残念だ。

プラン通りにはいかないが、ホテルでアペリティフのワインを飲み、食事をし、夕日を諦め帰途に着いた。

巡礼の最大目的はもちろん 聖ヤコブの遺体があるサンティアゴ・デ・コンポステーラの大聖堂だ。伝説によれば、イエスの12使徒の一人である聖ヤコブがエルサレムで殉教した後、その遺骸がガルシアまで運ばれ埋葬された。813年、隠者ペラギウスは天使のお告げによりヤコブの墓があることを知らされ、星の光に導かれて司教と信者がヤコブの墓を発見したとされる。その墓の上に建てられたのがこの大聖堂だ。

3日前にこの大聖堂を訪れた。A Coruñaから電車で日帰りした。ローマ、エルサレムと並んでキリスト教の三大巡礼地に数えられている。

さすがに大勢の旅行客、巡礼者がいる。スティックを持ち、膝や足にテープを巻いた人たちもいる。何キロ、何日 歩いたのだろうか。

巡礼の道は、いろいろあり、コースが選べるようだ。大聖堂の入り口で持ち物チェックのため 少し並んで中に入る。狭い通路を通り、聖ヤコブの黄金の像の後ろに回り、肩に手を置くのが慣わしだ。巡礼地を歩いたのでもなく、キリスト教信者でもない私が 長蛇の列につられて 肩に手を置いてしまったのは なんとなく申し訳ない気分だ。正面から見るこの聖ヤコブ像の頭上には 巨大な大勢の黄金の天使たちが天上を支えている。パイプオルガンも 素晴らしく華麗だ。ユネスコ世界遺産の一つであることに疑いはない。A Coruñaで これも世界遺産の一つ 『ヘラクレスの塔』も見学した。1世紀にローマ人によって建築された世界最古の現役の灯台だ。

スペインの文化は畏れ多い。



ニュースレター51、8月20日

風が暖かい。

暖かい風が存在することを再確認する。

17日、スペイン A Coruñaに到着した。

アイルランドから南イギリスNewlynまでの29時間がきつかった。

大西洋からの波が高く、雨も降った。

同乗のミシェルは船酔いでダウン、私も 船内に戻ると気分が悪くなる。

食欲も湧かない。

元気なルカスが2時間ほど横になっただけで 船をコントロールしている。

船の傾きも大きく 戸棚を開けると物が落ちてくる。夜中 やっとの思いで 救命ベスト、何重にも着ている服を脱ぎ ベッドに横たわる。

夕方6時半に港に着いた時は 心底ほっとした。

翌日から 四日間から五日間 ノンストップでスペインへ向かうのだ。

風は順調、波はおさまり 南へ向かう。

4時間ごとに当番を変える。

私は 夕方7時から11時まで、就寝後 朝7時から11時まで当番だ。時々 舵を取るが ほとんど自動操縦で進む。

海に沈む夕日は くっきりオレンジ色で美しい。時々 イルカも飛び跳ねる。

食事は相変わらず 私が料理する。

三日目、四日目は風がなく エンジンをかけて走る。陸が見えた時は ああ、やっと と
安堵した。安定して走行が伸び 三泊四日後 夕方 無事 港に着いた。

三日目ぐらいから 風が暖かくなり上着が一枚、2枚と減っていった。

港で浴びるシャワーに 感激する。

さあ タパスを食べに行くぞ！



ニュースレター50、8月7日

8月1日、スイス人が二人もいると 当然建国記念日は祝わなくてはならない。

Bangor(北アイルランド)の港を出て いよいよアイルランドへ。(北アイルランドはイギリスに属している)

入りたかった港は いっぱいで その近くでアンカーを下ろす。

夜、国旗付きランプを灯し、ウイスキーで乾杯。

さて就寝、、、が高い波が。暴風雨だ。揺れが激しい。
ベッドの上で 右にゴロン、左にゴロン。面白いように体が転がる。ゴロン、ゴロン、戸
棚の中身もゴロゴロ、ゴロゴロ。これは全身マッサージなのだと言い聞かせ、ゴロン、ゴ
ロン、ゴロン、ゴロン。

夢は見たので 途中少しは寝入ったらしい、が寝た気はしない。アンカーが動くたびに
アラームがピッ、ピッと鳴る。

それでも朝は来る。

8時前、ルカスがアンカーがずれているから すぐに出発すると。

顔も洗わず、身支度を整え、甲板に。もちろん雨も降っている。

アンカーを引き上げる。船前方で後処理をしていたティスは 波に洗われ背中に浸水。気
の毒だ。

あまりの揺れに お湯を沸かす気力もない。

少し揺れがおさまった時、やっと 皆でインスタントスープを飲んでホッとする。

40マイル先まで走り、予定のアンカー場所へ、しかし 高波は続いており、これは当然
またゴロンゴロンと転がるしかない。皆 うんざりしており、そこからまた12マイル先の
ダブリンまで走り続けることにする。

まだ日は長い。

7時半ごろ ダブリン郊外の Howth港にたどり着いた時はへとへとだった。

美味しい魚料理に安堵した。



ニュースレター49、7月29日

7月29日、アイラ島を発ち、北アイルランドの島 Rathlin Islandに着く。

翌日の今日、海流と風の都合で 午後2時に出発、本島に向かう。距離は近く 眼前に見える。

スコットランドの風景を見ながらも　いつもこの詩が　浮かんできたが　いよいよアイルランドに到着だ。

汽車に乗って

あいるらんどのような田舎へ行こう

ひとびとが祭りの日傘をくるくるまわし

日が照りながら雨のふる

あいるらんどのような田舎へゆこう

ここまでしか覚えてはいないが。

相変わらず　天気予報はあってないようなもので、海上の今も　東の上空は青空が見えているが　西のアイルランド本島上は黒い雲がかかっている。いつ雨が降ってもおかしくない。



ニュースレター48、7月28日

村上春樹の新刊　『街とその不確かな壁』を今回のセーリング中に読んでいた。図らずも
その中で、コーヒーショップの女性が　「私」を誘ってウィスキーを飲む箇所がある。ポ

ウモアの12年もののシングルモルトだ。『アイラ島のウィスキーには泥炭と潮風の匂いがする』というのを読んで、アイラ島を訪れるのを楽しみにしていた。

これまで Campbeltownの伝統的にすべて手作業、Raasayの近代的だがこじんまりした、Juraの個性的な蒸留所を見学した。

そしてここアイラ島は なんとと言っても 9ヶ所の蒸留所が存在するのだ。

停泊している港Port Ellenから 沿岸沿いにあるThe three Distilleries Paths (三つの蒸留所の道)を辿り Laphroaig、Lagavulin、Ardbeg 3ヶ所の蒸留所を見学した。

のんびり 徒歩で 散歩も兼ねて。このどれもが かなり大規模な蒸留所で、Ardbegはルイヴィトン傘下にあるので、あまり親しみは感じなかった。午前中だったこともあり、試飲も避けた私は ウィスキー通になるのは程遠いと思う。

ボウモアの蒸溜所は行かなかったが お天気にも恵まれ 羊、牛の群れ、素敵な景色も十分味わった。

金曜日の今日、海岸で結婚式を挙げているカップルにも偶然出会い、めでたさこの上ない。

これから向かうアイルランドのウィスキーも楽しみだ。

寝る前に ちょっと飲むウィスキーは 良きセーリングの道連れだ。



ジョージ オーウェルの住んでいた家

ニュースレター47、7月26日

7月25日、ジュラ島北部の湾にアンカーを下ろす。

ジュラ島とスカバ島という2つの島の海峡部分コリーヴベッカンは、世界で3番目に大きいとされる巨大な渦潮をもたらす。この海峡部分で発生する潮流変化、そして海底から200mもの高さで海中にそびえる岩がこの大きな渦を引き起こす原因と言われている。

「コリーヴレッカン」とはゲール語で「鬼婆」を意味し、海の女神であるこの老女によって吐き出される息がこの渦潮をもたらすものと信じられてきたそう。

ルカスとティスが ゴムボートで上陸、徒歩で渦の見られるところまで行った。道と呼ばれるようなものはなく、葦状の草をかき分け迷いながら一時半かけて到着、帰りは雨に降られず濡れで戻ってきた。船内でのんびり過ごした私は正解だった。

ジュラ島は作家ジョージ・オーウェルが「1984」を執筆した島としても知られている。父方はスコットランドの出身で、長年あたためていた小説の執筆の場として選んだのが、ジュラ島だったのだ。何よりも必要だったのが文明とは隔離された世界で、バーンヒル荘の10マイル四方には1軒の民家もなく、もちろん電話も電気もない。3年後に完成し、1949年に初版が刊行された。1984年と付けたのは、完成したのが1948年だったからだ。

ジュラ島は面積は約370km²、人口212人。野生の鹿が5000頭近く棲息し、昔から“鹿の島”といわれていた。

そのジュラ島に1810年に創業したのが、ジュラ蒸留所だ。ただし現在の蒸留所は1963年に新しく建てられたもので、昔のジュラ蒸留所とは関係がない。このジュラ蒸留所が90年代にボトリングしたのが、「1984年」というボトルだ。残念ながら現存していないが。

翌日 ジュラ蒸留所を訪れた。島の沿岸に近く「JURA DISTILLERY」と記された建物が見える。船をブイに留めて、ゴムボートで上陸、すでにウィスキー様の匂いが漂っている。時間が遅く ガイドツアーに参加できなかったが、3種類試飲してみた。ここには3万個の樽が貯蔵されている。ウィスキーそれぞれの特徴が記されているが 複雑な味わいはまだまだ把握しかねている。

ウィスキー修行は続く。



ニュースレター46、7月14日

7月13日、Tarbert (Isle of Harris)に着く。ここのハーバースター(港長)は若い女性で思いっきり元気が良い。船が桟橋近くになると、大声で指示してくれ、無事湾内に停留できた。ここで5年目だが初めてのスイスの船だと、歓迎してくれた。小さな港だが設備も整っており気持ち良い滞在となりそうだ。

翌日、バスで1時間ほどのストーノーウェイ(Stornoway、Isle of Lewis)へ出かけた。

ハイランド地方で3番目に大きい街だ、と言っても人口約9000人だが。

ここのリュース城(Lews Castle)はサー・ニコラス・ジェームス・サザーランド・マセソン Sir James Nicolas Sutherland Mathesonが1844年にこのルイス島を購入し、建てたものだ。この準男爵は清国とのアヘン貿易で富を築いたのだ。

長州五傑(井上馨、遠藤謹助、山尾庸三、野村弥吉、伊藤博文)の英国留学は、このジャーディン・マセソン商会横浜支店が支援した。そして彼らの英国滞在中はマセソンの甥にあたるヒュー・マセソン商会ロンドン社長が世話役となった。

なんだかんだと言っても結局麻薬のおかげで日本人も恩恵を受けた様だ。お城の広い庭にはポピーの道なんてネーミングが見られたがそんな可愛らしいことではないと、歴史の複雑さを垣間見る。

ルイス島で造られたウィスキー、Abhainn Dearg、少しフルーティーな香りの飲みやすいものだ。



7月11日、ニュースレター45

7月6日、バラ島 Isle of Barraに到着する。この日、夕方から強風となる予報で、早朝6時に出発し、なんとか無事港に入ることができた。

すでに 風は強くなっており、我々の前に入港していた帆船の隣に横付けにする。陸に上がるためには この船を経由しなければならないが なんとも大きな船なのだ。男二人の手を借り、甲板へよじ登り、栈橋側では足の届かない距離を 支えてもらいながら渡る。が、失敗、足が届かず 足先が水に入ったところで ルカスに引き上げてもらう。そうやって やつとの思いで暴風雨の中を レストランへ向かった。

帰りも 栈橋は波に洗われており、びしょ濡れになって また船によじ登った。

住人1000人ほどの小さな島だが 空港がある。

バラ空港Barra Airportは 世界で2番目に危険な空港なのだ。

砂浜を滑走路としているのだが、当然 干潮の時にしか 着陸、離陸できないのだ。見学のため、干潮時を事前にチェックして バスで向かう。

乗客19名の小さな旅客機がグラスゴーから来る予定だ。

風が強い。そのためか 予定時間よりも早く空港上空に飛行機が現れる。

まだ十分 水は引いておらず、風も強いため、飛行機は 5回くらい 旋回した。 乗客よりも見学者の方が大勢だ。

やっと体勢が整い、機体が降下してくる。

飛沫をあげ、沿岸に無事 到着した。

小さい飛行機で強風に煽られ どんなに揺れたことか、乗りたいとは思えない航空路だ。

偶然、バグパイプのコンサートツアー中というグループが この島にきた。

13名の老若男女がお揃いの民族衣装キルトを着けて演奏する。

あまり長く聴いてはられない類の音楽だが、生演奏はやはり楽しませてくれる。

陸に近い海上に キシムル城が建っている。

暴風雨の後の晴天に すべてが美しく見えるスコットランドの光のマジックは 言葉で言い表すことがむずかしい。



ニュースレター44、7月1日6月30日、夕方Ardrishaigに着く。

The Crinan Canal クリナン運河の入口だ。1793年から1801年に施行された運河で、元々はウィスキーの運搬のためだ。全長14km、15ヶ所に閘門Lockがある。到着先が クリナン(Crinan)だ。

まずはひとつ目の閘門内に入る準備を始める。どうもあまり把握できていないまま、船に待機する。2ヶ所にザイルを用意し、フェンダーを設置する。

トーマス(前日から乗船している)が陸に上がり、私が 船からザイルを投げ入れる手順だ。ルカスはもちろん舵を取っている。

が、勝手が違った。船から陸にザイルを投げ入れるのは 結構上手くなったつもりだったが、ここは上空5mの陸に向かって投げ入れるのだった。無理だ。ルカスが駆け寄って替わりに投げ入れた。

閘門内に船が固定され、門が閉じられ 水位が上がってくる。かなりの勢いで水が入ってくる。船が陸と並行になるところで ザイルを解きトーマスも船に戻る。

すぐに二つ目の閘門だが、この日は時間切れで、翌日の朝 続行する。後14ヶ所、この作業をせねばならない。

最初の8ヶ所までは 作業を手伝ってくれる専門の人たちがいた。

ザイル投げを棄権した私は まず 船から上陸し、陸に張り出ている水門上の太い柱を背中で押して水門を開く。

作業を手伝ってくれた人が、ルカスに 「この人では力不足で無理だから 次回は別の人に替わって。」と やれやれまた失業か。6ヶ所目で ジョーがぶっきらぼうながら ちゃんとやり方を教えてくれる。いろいろと手順があるのだ。会話しながら。「船の仕事についていたの？」と聞くと、「ああ、サウジアラビア方面が専門だった。」「日本へ行ったことある?」「イヤー、でもタイとフィリピンと どこだったかなー行ったよ。」「66歳にもなって こんなことするとは思わなかった。」「俺は 63歳だよ。」「ここに住んでいるの。」

「いや、キャンピングカーで。これは夏場の仕事なんだ。今回の仕事が終わったら ドバイで3ヶ月休暇だ。」

「どんなに急いでいても絶対走らないこと、段差があぶない。」ジョーのおかげで8ヶ所、無事に過ぎた。

運河の高低差は40m、9ヶ所目の手前 一番標高の高いところの閘門の手前で もう一泊する。

この間 もちろんエンジンを掛けての走行だ。

閘門の開くのを待っている間、隣の船の人たちと話をする。スコットランドの西側は夏中 あちらこちらで コンサートが催される様で それを聞きに行くのだそう。 運河脇の木々の茂みは青々とし、草花は咲き乱れ、一頻りの雨と強い日差しが頻繁に繰り返される。北の夏はいろんなことで忙しい。



ニュースレター43、6月27日

グラスゴーの郊外 Inverkipの港にいる。

6月25日、3週間一緒に過ごしたトーマスとマヤが 帰途に着く。

それ、掃除洗濯だ、と思いきや、村の水道管 破裂とかで まったく水が使えない。(港にある洗濯機使用のため)

これは グラスゴーへ行くしかない。ここから 電車で小一時間だ。傘がないので 駅まで15分、ずぶ濡れとなる。

駅にはタンクトップとショートパンツの若者が。この人達は寒さを感じないらしい。

グラスゴーのケルヴィングローブ美術博物館へ出向く。

メインホールの正面は 巨大なパイプオルガンがあり、3時から演奏と、都合が良い。 安っぽいカフェに座り、演奏を待つ。

前面のパイプは偽物、実際に音を出すのは後ろに隠された 2889本のパイプだ。

ここは無料の博物館で、歩行器、車椅子、バギーを使用する人達が右往左往、子供らも走り回り 泣き声も響いている。

が、ナンノソノ、オルガンの音は大理石の床に反響し、吹き抜けの天井へと舞い上がる。オルガニストの下にあるスクリーンには 鍵盤を叩く手と、ペダルを踏む足がクローズアップされて映し出されている。

教会ではないので宗教的な音楽だけでない。

思いもよらず素敵な演奏に 幸福度増大、久々の文化的経験だった。

1901年に開館され、美術品から生物、古代エジプトなど、22個のテーマに分かれ、約8,000点もの展示が見られる大きな博物館だ。

サルバドール・ダリの『サン・ファン・デ・ラ・クルスのキリスト』が見られ、ものすごく得した感、うれしい。

しかし あまりにも種々雑多な展示に疲れてしまった。

2023年4月に亡くなった マリー・クワント(ミニの女王)の特別展は 横目で眺めただけだった。

グラスゴー効果(Glasgow effect) と呼ばれ、他のヨーロッパやイギリスの都市と比べ、グラスゴーの平均寿命は異常に短い。パブでの飲み過ぎが原因というのは雑学として。



ニュースレター42、6月20日

6月17日、The Skerries を早朝発ち、夕方 マン島Isle of Manに到着する。

アイリッシュ海の中央に位置した島だ。複数の国の間で統治権が移動する複雑な歴史を持ち、1765年以来、イギリス王室の支配下にある。

1919年には イギリス本土に先駆けて 婦人参政権が導入されている。1942年から1945年には 在英日系人の強制収容所が設置されていた。

『由緒正しき崇高なレース』として有名なのが マン島TT(ツーリスト トロフィー)レースだ。1907年に始まったこのモーターバイクレースは、現在でも公道を閉鎖して行なう「公道レース」として開催されている。

1959年に Hondaが初出場し、その名を高めている。

今年は6月初めの1週間 開催された。我々の到着は間に合わなかったが、かなりの観光客で賑わう様なので 避けられて幸いだった。

何が有名かというと必ず 事故死が発生するのだ。

散歩中に、二人連れおじさんに 「今年は何人亡くなったんですか。」と聞くと、「たった一人だけだ。」とのこと。

何があっても開催される 由緒正しきレースなのだ。

一人のおじさんの腕に芸者の刺青が入っている。「日本に行かれたことがあるの?」「イヤー、飲みすぎて 朝 気がついたらこの刺青が入っていた。」とのことだった。

素敵なホテルなどが並ぶ砂浜沿いに 大きな三人組の銅像がある。髪型などから ポップスターだろうなとは思ったが、記されている名は『ビージーズ』だ。この三人兄弟はこの島生まれだったのだ。

ああそうなんだと、後で船に戻り 懐かしい曲をしみじみ聴いた。

翌日 霧が深く何も見えない中での出港、霧笛が聞こえてくる。



ニュースレター41、6月16日

ウェールズの西沿岸を北上している。

Holyheadの港は 5年前の暴風雨でほとんどの桟橋が破壊されている。その後、防波堤の高さを巡る政治的な談合がまとまらず、修理されていない。

我々の船は陸近くの安定した桟橋に着くことができた。

天気は最高で暖かい。

会う人皆が、「こういうことはほとんどない。」と嬉しそうに語る。が、その代わり風もない。風がないことには先には進めない。エンジンを掛けて走ることは可能だが、その騒音にはつくづくうんざりする。

港に船をつけている人たちは 皆 親切だ。それぞれが いろいろなアドバイスを 丁寧に教えてくれる。近くの、セーリングガイドに載っていない小さな島のムーリング場所(固定されたブイ)を教えてもらう。

Holyheadから その島The Skerriesまでは エンジンを掛けて1時間ほどで到着した。引き潮時、岩を避けつつ 湾に定着する。

ちょうど昼食時、事前にルカスが焼いたツOPP(三つ編みパン)で素敵なランチを楽しむ。

島は赤と白で塗られた灯台があり、どうやら鳥の観察施設がある様だ。大きな雨傘をさした人が岩上を歩いている。雲ひとつない青空の下で。傘は鳥の糞よけに違いない。

何千羽もの鳥が 一斉に飛び交うのは その羽音と共に凄まじい。海ツバメのようだ。反対側の岩場には カモメやパフィンもいる。岩場で水から出たり入ったりしている頭はアザラシのそれだ。

ゴムボートで島に上がろうとしたが、しっかり立ち入り禁止の立て札がある。ボートを降りて、引き潮の泥の中を歩いてやっと辿り着いたのだが 諦めて戻る。

様々な鳥の鳴き声を聞きながら、アザラシの悠長な動きに思わず笑ってしまい、潮が満ちていく風景の変化を眺めるのは なんと平和なことだろう。

後は Isle of Man(マン島)へ行くための 風を待つだけだ。



ニュースレター40、6月14日9月10日、9時過ぎ、シリー諸島を去り、イギリス本土 アベリストウィスAberystwyth へ向かう。300km、180海里、夜間も交代で見張りに立ち、走る。食事係の私は 見張りは除外してもらう。夜中、マヤは イルカの並走の恩恵を受ける。アベリストウィスに近づくが、霧が深く 沿岸がなかなか見えない。イギリス・ウェールズの西海岸沿いにある港町だ。人口2万人ほどだが、キング・チャールズの学んだ大学がある。ロンドンまでは電車で5時間だ。まずはシャワーだ。6日間浴びれなかった暖かいお湯は 本当に嬉しい。海岸沿いに並ぶ家々はパステルカラーで雰囲気のある建物だが、潮風のせいか傷んだところも目立つ。日曜日ということもあり これと言ったレストランも開いておらず、定番 フィッシュ&チップスの夕飯をとる。

翌日 洗濯や買い物もすませ 散歩に出る。アベリストウィス城は13世紀の要塞跡、かつての王の重要な防衛拠点だったそうだが、要は残骸のみだ。

Constitution Hill という丘へ登る。ケーブルカーでも行けるがたいした高さでもない。ドアップリと霧で遠景は望めないが あまり寒くないのありがたい。

頂上のレストラン、後10分で閉店だが テラスには居られる様で ここでプロセッコで乾杯、誕生日を祝ってもらった。隣のカップルにも一緒に「ハッピーバースデー」を歌ってもらう。これから 徐々にスコットランドへ向かう。



ニュースレター39、6月8日

6月6日、前日からマヤとトーマスが新クルーとして乗船している。

9時半に Newlynを発ち、シリー諸島(Isles of Scilly)へ向かう。ゴルフ海流中にあり、コーンウォールのカリブと呼ばれる。

シリー諸島は 約140の島、岩礁で、その内5島が有人島(約2000人)だ。

夕方5時半、その一番大きい島 St.Mary'sの湾にアンカーを下ろす。

風は順調で速度も快適に進んだが 波が高く揺れ方は尋常ではなかった。初日から船に慣れないまま、その揺れの中、20海里(40km)を走ったのは、新クルーにはハード過ぎた様で、気の毒ながら船酔いしてしまった。申し訳ない。

歴史的には 紀元前2000年頃の住居跡が発見されている。紀元前1世紀には古代ローマの支配下にあった。ロイヤルファミリーも休暇で来られる様だ。

翌日、ディンギー(ゴムボート)で上陸する。向かい風が凄まじく、漕ぎ手のトーマスは冷たい風にも関わらず 汗だくだ。(ルカスは所用で船に留まっている)

強風に押され、目的の砂浜に到着できず、岩上をトーマスとマヤがボートを抱えて運ぶ。今は引き潮だが、潮が満ちても困らないところまで運んでもらう。

そこから 島をぐるっとハイキングする。中心地は土産物屋、ホテル、レストランとそれなりの賑わいだ。

海岸沿いの歩道脇は 様々な色彩のスイスでは見たことのない花々も咲き乱れている。きっと強風に負けない強靱な草花に違いない。花粉も当然ながら強力で しっかり鼻炎の症状がでてしまった。

カリブと称するには 風は冷たすぎる。

もちろんイギリス人は13度の水温の海で泳いでいる。



6月2日、買い物も済ませ、夕方 Newlynを発ち、セント・マイケルズ・マウント島へ向かう。

島の中央の小高い丘に 城が建っている。

干潮から中位時には、グレートブリテン島の マラジオン町と人工の花崗岩の土手道で地続きになる。この様子がフランスの有名な世界遺産モン・サン＝ミシェルに似ていることから、英国版モン・サン＝ミシェルとも呼ばれる。

「聖ミカエルの山」という全く同じ名前なのだ。

1135年に建てられた教会の跡地に 現在の建物は14世紀後半に再建されたものだ。

ナショナル・トラストによって管理されており、約1650年以来、城と礼拝堂はセント・レヴァン男爵セントオービン家の所有である。

島の近くでアンカーを下ろす。

翌日、干潮時にゴムボートで島に到着する。

管理人らしい人がやってきて 「土曜日は この島は立ち入り禁止ですよ。明日、入場チケットをオンラインで購入してまたおいでください。」と。

どうして土曜日が閉館なのかを問うと、「所有者も静けさが必要だし、メインテナンスの日でもあるから。」

「ここに何人の居住者がいるのですか。」

「30人程です。」

また翌日来ることにし、船に戻る。

そして今日、再度 チケットも購入し、島に上陸する。

潮が満ちる前に まず石畳の道を渡って、マラジオン町へ。

観光客がかなりいる。

天気は最高、皆 夏衣姿だが、私はしっかりとジャケットを着ている。風は結構冷たいのだ。

イギリスに来て コーニッシュ・パスティ(具入りペイストリー)がすっかり気に入って 昼ごはんに食している。パン屋で今日もそれを買って、島へ歩く。

伝説によると、城が建てられる前の6世紀、マウント セント マイケル島にはコーモランという名前の18フィートの巨人が住んでいた。ジャックという名前の若い農夫の息子が、牛と子供たちに食欲をそそる巨大な脅威に立ち向かい、斧を頭に当てて隠し穴に閉じ込めて殺した。彼が家に帰ると、村の長老たちは彼を英雄として歓迎し、それ以来彼を「ジャック・ザ・ジャイアント・スレイヤー」と呼んだ。

お城の中は 各部屋に案内の人がおり 親切に説明をしてくれる。

もちろんプライベートで入れないところはある。
プライベートと書かれたところから出てきた人が 当主らしくて思わず ドキッとしてしまう。

城は 夜 ライトアップされる。
今夜は満月だ。



ニュースレター37、5月27日

5月18日、サーク島(Sark) に到着する。

去年、このチャンネル諸島の ジャージー、ガーンジー、オルダニー島を訪れた。

サーク島は初だ。16世紀にエリザベス1世から島の統治権が領主に与えられ、2008年まで自治を存続するが、その後民主制に移行した。面積約5.5平方キロメートル、人口約500人。自動車は禁止されており、馬車、トラクター、自転車で移動する。

島は大きいサークと小さいサークからなり、狭い地峡ラ・クーペで繋がっている。地峡を覆う100メートルの狭いコンクリート道路は1945年にドイツ軍の捕虜によって建設された。

このラ、クーペからの海を望む景色が素晴らしい。新緑、様々な草花で鮮やかな岩壁と白い砂浜、青い海。

散歩途中、お姉さんがこの郵便局に勤めているという女性と立ち話する。彼女はオーストラリア在で休暇で訪れているそう。ご主人は現在ドバイに勤務(実はスイスでの就職を希望していたが、コロナ禍の犠牲で叶わず)、息子はイギリス、娘はオランダにいるそう。なんでお姉さんがこの郵便局にいるのか聞き損ねたのが残念だ。



ニュースレター36、5月27日17日から22日 チャンネル諸島を巡り シェルブールに戻る。船の調子、すこぶる良し！修理中だった雨除け、カバー類も無事設置し、翌日 いよいよイギリスに向かう。最適な風向き、海流の時間を調べ、午後12時半に出航する。夜間の航行は やはり昼間よりも寒い。夕飯『お好み焼き』で温まる。今回も十分なおたふくお好み焼きソースを携帯しているのは言うまでもない。海に沈む夕陽を眺めつつ、イギリス沿岸が見え始める。イギリス時間11時半(フランス時間12時半)、Chapman's Pool湾に到着、アンカーを下ろす。明かりのない真っ暗な湾の上空、三日月が燦々と輝いている。

ニュースレター35、5月16日

ほぼ1週間かけ、出航できるまでの準備が整った。

完璧ではないが、セーリングに支障はない。

午後2時45分から 試し乗り開始、天気は上々、風も十分にある。

3人乗りの小さなヨットで 小学高学年ぐらいの子供らが、10隻は連なって セーリングの練習をしている。ゴムボート上の大人が指導している。こうやって 小さい頃から鍛えれば、風も波も怖いものなしだろう。

帆の上げ下げも順調に、港を一回りしてまた元の桟橋に戻った。

明日は早朝から出発予定だ。明日の風向き次第で 行き先を決める。

船の部品が1週間後に届く予定なので また シェルブールに戻る予定だ。

イギリス行きはどうか？



ニュースレター34、5月13日

5月9日、Thunを後にする。

パリでの電車乗り換えも円滑に、夜8時半 シェルブールに到着した。

大きな荷物三つに それぞれリュックサックと ソーラーパネルも持参、体力があるというのは幸いだ。

ホテルに到着後、レストランでの食事に、フランスに来たことを実感する。

魚が美味しい。

翌日 4時予約のクレーンでの船の進水は、5時から始まった。

無事、6時過ぎに Mayonaは桟橋に定着、セーリングの準備開始だ。

やはりフランスはフランス、物事は思った通りには進まない。

散々 確認し、3月のシェルブール再来時には確実にオーダーしたと思ったことが、為されていない。

船底の塗装、傷の修理はりっぱに終わっており、これにはホッとした。

が、帆の補強は終わっておらず、注文したレイジーバッグ(帆をしまっておく袋状の物)は全く忘れられていた。

電気系統も完全には終わっていなかった。やはりというか、そういうもんだな、フランス。

11日に友達夫婦が来てくれた。

長年の友達マークスは機械エンジニア、新しい無線の設置なども ルカスと一緒に こなしてくれる。働き者の妻スーザンは サッサと甲板掃除に励んでくれる。

器材の不備で いつ出発できるか不明だが、楽しい団欒ではある。

さて今夜は 何を食べようか？



ニュースレター33、1月28日

2023年もめでたく明け、雪山の景色も堪能している。が、海が恋しく うずうずしている。 この4ヶ月の地上生活、ここでの重要年中行事クリスマスも無事終え、家族再会も楽

しんでいる。孫の成長にも目を見張っているが、たいした義務も責任もないのが 本当ありがたい。

5月からの再出航に備え、いろいろ準備している。シェルブールに置いてある船は 修理やらペンキ塗りやらで 人手に任せているが、やはり順当とは言い難い。どうも 我々の船、アルミニウム材に不適當なペンキを使用されたようで、やり直しのための工程や、保険支払いについてなど 面倒なやり取りが続いている。とは言え、すべてルカスがやっていることなので ちょっとした愚痴をきくだけが私の役目だ。

今(2023年1月21日～29日)ドイツのデュッセルドルフではヨーロッパ最大の 国際ボートショーが開催されている。何隻ものヨット、ボート、設備、材料関係 全てが展示されている。 Mayonaに必要な機具の調達のため 2泊3日で行ってきた。 ドイツ最大の日本人街で有名な都市だ。和食の食材も豊富と聞いており、ほとんど空のスーツケースで片道7時間の電車の旅を楽しむ。二日間の夕飯のためのレストランは事前にしっかりリサーチし、和食のみだ。 広大な展示場は すべて見切れない。なぜか ナイフ類を扱うところで 日本の包丁があり、ちょうど欲しかったので購入した。 冷かして 何隻か船内も見学してみた。中古の船ばかり見てきた私には 新品の船は眩いばかり、パーティー目的の船も多いのだ。見学後 くたくただったが、スイスではなかなか食せない豊富な和食に疲れも吹っ飛んだ。もちろん 日本酒のお供で。

前回のセーリングで 寒さ対策の必要性をひしひし感じていたので、すでに メリノウールの下着は調達した。新たにキャンプ用のコーヒー湧かし、オーブンを使わないパン焼き器(ガスレンジ用)等々、そろえている。

5月からは イギリス、スコットランドへ向かう予定だ。



Boot Düsseldorf 2023

[Edit](#)